

# 中国語話者による複合動詞「V1-飽きる」の V1+V2 結合意識

杉村 泰

## 1. はじめに

日本語の「V-V」型複合動詞における前項動詞(V1)と後項動詞(V2)の結合規則については、影山(1993)の「他動性調和の原則」、松本(1998)の「主語一致の原則」、沈・林(2009)の「自主性調和原理」などが提唱されている。しかし、これらの規則は(語彙的)複合動詞全般に見られる一般的原理について述べたものであり、抽象度が高くて日本語教育にそのまま応用することはできない。日本語教育のためには、個々の「~V2」形式ごとに日本語母語話者と日本語学習者の頭の中にある V1 と V2 の結合規則を抽出し、両者のズレが大きい部分と小さい部分を明らかにしていく必要がある。

このような立場の下、本稿では「V1-飽きる」を取り上げ、日本語話者と中国語話者の V1+V2 結合意識の違いについて考察する。その結果、中国語話者は V1 が他動詞や無意志自動詞の場合には日本語話者に近い感覚で許容度を捉えるのに対し、V1 が意志的自動詞の場合には、「動作主指向性の意志的自動詞」の許容度は高く捉え、「対象指向性の意志的自動詞」の許容度は低く捉える傾向があることを指摘する。

## 2. 先行研究

### 2.1 複合動詞の V1+V2 結合に関する一般的原理

影山(1993)は語彙的複合動詞の V1+V2 結合について、「他動詞+他動詞、非能格自動詞+非能格自動詞だけでなく、他動詞と非能格自動詞が混在した複合動詞も可能である。他方、(中略)基本的に非対格自動詞は非対格自動詞としか結合しない(p.117)」として「他動性調和の原則」を提唱している。これは以下のように同じx(動作主)を項にもつもの

同士やもたないもの同士は複合動詞を形成するが、両者の入り混じったものは複合動詞を形成しにくいことを指摘したものである。

影山(1993)の「他動性調和の原則」

a. 他動詞: (x <y>)

b. 非能格自動詞:(x < >)

c. 非対格自動詞: <y>

・a+a, b+b, c+c, a+b, b+a…結合可

・a+c, b+c, c+a, c+b…結合不可

これに対し、沈・林(2009)は「一般に、他動性は外項より内項を中心とする概念である(p.208)」として、「他動性(transitivity)の調和」ではなく「自主性(agentivity)の調和」であると主張し、これが日本語だけでなく中国語にも適用されるとして、“打-死”(他-非対格)や“哭-湿”(非能格-非対格)という組み合わせも“CAUSE”の仮説を導入することにより「自主性調和原理」で説明できることを指摘している。

一方、松本(1998)は「歩き疲れる」や「泣きぬれる」(非能格+非対格)、「読み疲れる」や「飲みつぶれる」(他+非対格)のように「他動性調和の原則」に反する例を挙げ、V1+V2には「主語一致の原則」が働いていることを主張している。これを受け、杉村(2007)では「V1-疲れる」のV1の特徴について分析し、同じ他動詞でも「読む」や「食べる」のように動作主の状態変化を表すものは来やすいが、「壊す」や「燃やす」のように対象への影響を表すものは来にくいことなどを明らかにした。この結果は「V1-慣れる」や「V1-飽きる」にも共通して見られる現象であり、「V1-直す」の多義性とも関わるなど、<sup>1</sup> 動詞の他動性を考える上で興味深い事実を示している。<sup>2</sup>

なお、松本(1998)は様々なテストの結果「V1-疲れる」を語彙的複合動詞に分類しているが、「～するのに疲れる」という補文構造が認められる点では統語的複合動詞であるとも考えられる。しかし、「V1-始める」や「V1-忘れる」に比べてV1の制限が厳しく、影山(1993)のテストでもいくつか適合しない点において語彙的な色彩も見せる。これと同様に、本稿で扱う「V1-飽きる」も「～するのに飽きる」という補文構造が認められ、影山(1993:96)では統語的複合動詞に分類されているが、「V1-疲れる」と同じように語彙的な色彩も見られる。この

<sup>1</sup> 同じ「他動詞+直す」でも「私は枝を切り直す」は対象である「枝」の形を修正するのに対し、「私は夕食を食べ直す」は動作主である「私」の食事に対する満足感を修正するという違いがある。このうち、中国語話者には後者のタイプの「V1-直す」の解釈が難しいようである。

<sup>2</sup> 他動詞の二分類については、天野(1987)や工藤(1995)などにも指摘されている。

ように語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別はさほど容易ではないため、本稿ではこの点については深く立ち入らないことにする。

## 2.2 「V1-飽きる」の先行研究

「V1-飽きる」について論じた研究には杉村(2009,2010,2011b)がある。このうち、杉村(2009)ではWeb 検索を利用して「V1-飽きる」の V1 の特徴を分析した。Web 検索の概要は次のとおりである。

検索エンジン: goo のフレーズ検索 (<http://www.goo.ne.jp/>)

検索日: 「V1-飽きる」2009 年 1 月 25 日～2 月 1 日

検索語: V1 は『日本語基本動詞用法辞典』にある 852 語を含む 1,068 語を対象とし、これと漢字表記の「飽き(る、た、ない、なかった、ます、ました、ません、て)」との共起について検索した。(表1にはこの8つの活用形の合計ヒット数が示してある)

表1 「V1-飽きる」の V1 に来る動詞上位 60 語 (WWW ページ)

	V1	ヒット数		V1	ヒット数		V1	ヒット数
1	聞く	311,339	21	吞む	185	//	泣く	49
2	見る	127,242	22	走る	173	42	抱く	44
3	食べる	34,964	23	歌う	138	43	嘔む	40
4	遊ぶ	16,436	24	歩く	115	44	考える	39
5	飲む	10,674	25	弾く	92	45	嗅ぐ	37
6	読む	5,203	26	話す	86	46	殴る	36
7	食う	3,620	27	生きる	83	47	殺す	35
8	言う	2,296	28	叩く	82	//	死ぬ	35
9	やる	1,255	29	抜く	80	49	笑う	33
10	書く	1,236	30	眺める	71	//	数える	33
11	行く	1,059	31	休む	67	51	投げる	32
12	乗る	695	32	語る	63	//	取る	32
13	住む	683	//	売る	63	//	探す	32
14	撮る	615	34	吸う	61	54	履く	30
15	寝る	535	35	答える	59	//	持つ	30
16	使う	400	36	買う	58	56	触る	28
17	作る	319	//	疲れる	58	57	戦う	26
18	待つ	280	38	打つ	56	58	通う	25
19	描く	249	39	踊る	55	59	貰う	24
20	着る	233	40	滑る	49	//	並ぶ	24

この結果、「V1-飽きる」のV1には表1のように他動詞や非能格自動詞が来やすいことが分かった。影山(1993)の分類基準によると、「飽きる」は意図性がなく、「(飽きさせる)→飽きる」のように受動的事態が想定できるため非対格自動詞に分類されると考えられ、由本(2008:14)でも非対格自動詞に分類されている。したがって、「V1-飽きる」は(1)、(2)のようなV1+V2結合となり、影山(1993)の「他動性調和の原則」に反することが分かる。この点で「V1-飽きる」は「V1-慣れる」や「V1-疲れる」と共通した性質を持つ。

(1) 私は日本料理を食べ飽きた。(他+非対格)

(2) 私はこのテレビゲームに遊び飽きた。(非能格+非対格)

なお、杉村(2009)では「V1-慣れる」と「V1-飽きる」のV1を比較して、「V1-飽きる」は「見る」、「聞く」、「食べる」、「飲む」、「遊ぶ」など動作主の目、耳、口、体の活動を表す他動詞と共起しやすく、相対的に「使う」、「着る」、「作る」、「描く」、「履く」、「住む」、「乗る」、「走る」、「歩く」、「通う」など「使用」、「作成」、「移動」に関する行為を表す他動詞との共起が少ないのに対し、「V1-慣れる」はそのいずれの動詞とも共起しやすいことを指摘した。

次に、杉村(2010)では日本語母語話者50人と中国語を母語とする上級日本語学習者(以下、「学習者」)40人を対象に、72語の「V1-飽きる」について〇×式アンケートによる文法性判断テストを行った。その結果、日本語話者はWeb検索でヒット数の多かったものほど高い許容度<sup>3</sup>を示す傾向があるのに対し、学習者は日本語話者と同等かそれ以上に高い許容度を示す傾向があることを指摘した。

次に、杉村(2011b)では日本語の「V1-飽きる」と中国語の“V1-膩”のV1+V2結合について、〇×式アンケートによる文法性判断テストを行った。アンケートでは杉村(2009)で「V1-飽きる」のV1になりやすかったものとなりにくかったもの合計72語(表2参照)を適宜抽出し、「聞き飽きた」のように文脈抜きで日本語話者に正誤判断させた。同様に“V1-膩了”についても日本語に対応する72語(表2参照)を選び、文脈抜きで中国語話者に正誤判断させた。<sup>4</sup> 調査の概要は次の通りである。

「V1-飽きた」

被験者:日本語話者(名古屋大学生)50人

実施日:2010年12月8~10日

<sup>3</sup> 本稿では文法性判断テストで「正しい」と判断した人の割合を許容度とする。

<sup>4</sup> アンケートで「タ形」や「了形」を用いたのは原形よりもそのイメージが捉えやすいためである。また、文脈を付けなかったのは文脈なしでもその複合動詞のイメージが頭に浮かびやすいかどうかを見るためである。

“V1-膩了”

被験者:中国語話者(天津の大学1年生)50人

実施日:2010年9月29~30日

この結果、両言語とも V1 には「聞く/听」、「食べる/吃」などの動作主指向性の他動詞や「遊ぶ/玩」、「住む/住」などの意志的自動詞が来やすく、「切る/切」、「燃やす/烧」などの対象指向性の他動詞や「困る/为难」、「光る/亮」などの非対格自動詞は来にくいことを明らかにした。

### 2.3 先行研究の問題点と本稿の立場

上述のように、杉村(2010,2011b)では日本語話者の「V1-飽きる」と中国語話者の「V1-飽きる」や“V1-膩”の共通性に焦点を当てて論じた。しかし、細部を見ると許容度に差の大きい部分もある(表2参照)。そこで本稿ではこのような日中語の相違点にも目を向けて考察する。

## 3. 中国語話者の「V1-飽きる」のアンケート

本稿では日本語話者の「V1-飽きる」、学習者の「V1-飽きる」、中国語話者の“V1-膩”の3つを比較することにより、中国語話者の母語の転移について考察する。<sup>5</sup> 杉村(2010)と杉村(2011b)では一部異なる V1 を使ってアンケート調査を行ったため、本稿では杉村(2011b)の72語を使って再度学習者に対して「V1-飽きる」の調査を行った。調査の概要は次の通りである。<sup>6</sup>

「V1-飽きた」

被験者:中国語を母語とする上級日本語学習者(北京第二外国語大学日語学院4年生)50人

実施日:2011年4月6,13日

この結果を杉村(2011b)の日本語話者、中国語話者の結果と合わせて表2に示す。

<sup>5</sup> 張麟声(2007:45)は、「A'とAの意味・用法がずれていて、そして、そのずれている部分について、学習者が十分に知らない場合は、たとえ応用段階の理解の側面においてあまり問題にならなくても、その表出の側面において間違いなく誤用を起し、いわゆる負の転移が実現することがある」と論じている。

<sup>6</sup> 調査では北京第二外国語大学の高木章江先生と熊仁芳先生の協力を得た。なお、“V1-膩”は杉村(2011b)のデータを使用した。

表2 「V1-飽きる」(日、中)と「V1-膩」の許容度の比較

※ 許容度は左から(日)「V1-飽きる」、(学)「V1-飽きる」、(中)「V1-膩」の順

※ 網掛けは意志的自動詞を示す

	V1 (日/中)	許容度 (%)		V1 (日/中)	許容度 (%)
1	見る/看	100 / 62 / 98	37	働く/工作	48 / 72 / 42
2	聞く/听	100 / 86 / 94	38	打つ/打	48 / 56 / 38
3	踊る/跳	100 / 72 / 58	39	鳴く/鸣叫	48 / 56 / 0
4	食べる/吃	98 / 90 / 96	40	並ぶ/排	46 / 30 / 8
5	歌う/唱	96 / 72 / 90	41	切る/切	44 / 46 / 14
6	遊ぶ/玩	94 / 80 / 98	42	考える/考虑	44 / 60 / 6
7	読む/读	94 / 80 / 84	43	怒る/气	44 / 30 / 2
8	書く/写	92 / 82 / 86	44	座る/坐	42 / 44 / 70
9	飲む/喝	92 / 82 / 80	45	悩む/烦恼	42 / 56 / 4
10	しゃべる/聊	92 / 76 / 70	46	壊す/破坏	42 / 38 / 2
11	話す/讲	92 / 78 / 84	47	押す/按, 推	40 / 46 / 12,10
12	言う/说	90 / 74 / 80	48	持つ/拿	38 / 32 / 10
13	泳ぐ/游	88 / 68 / 54	49	眠る/睡	36 / 60 / 46
14	乗る/坐(车)	86 / 24 / 60	50	来る/来	34 / 20 / 30
15	住む/住	82 / 52 / 82	51	動く/活动	34 / 50 / 20
16	作る/做	78 / 68 / 78	52	逃げる/逃	32 / 42 / 4
17	泣く/哭	78 / 78 / 36	53	選ぶ/选	30 / 40 / 30
18	探す/找	78 / 56 / 18	54	飛ぶ/飞	30 / 48 / 28
19	語る/谈	74 / 62 / 54	55	燃やす/烧	30 / 34 / 4
20	噛む/咬	72 / 70 / 8	56	暮らす/生活	28 / 46 / 20
21	待つ/等	70 / 78 / 64	57	休む/休息	28 / 60 / 20
22	走る/跑	70 / 76 / 48	58	驚く/吃惊	28 / 32 / 0
23	投げる/扔	70 / 52 / 10	59	泊まる/住	26 / 34 / 82
24	騒ぐ/吵(闹)	66 / 38 / 38	60	立つ/站	24 / 50 / 60
25	叫ぶ/喊	64 / 44 / 58	61	居る/呆	22 / 46 / 54
26	登る/爬	64 / 54 / 28	62	進む/进展	20 / 36 / 0
27	寝る/躺	62 / 84 / 68	63	帰る/回去	18 / 16 / 4
28	笑う/笑	60 / 70 / 20	64	迷う/犹豫	16 / 30 / 0
29	歩く/走	58 / 72 / 42	65	困る/为难	10 / 42 / 0
30	集める/收集	58 / 30 / 16	66	溺れる/溺水	6 / 30 / 0
31	攻める/进攻	56 / 44 / 0	67	倦む/厌烦	4 / 38 / 8
32	叩く/敲	52 / 50 / 30	68	咲く/(花)开	4 / 44 / 4
33	殴る/揍	52 / 64 / 8	69	萌える/发芽	2 / 26 / 2
34	折る/折	52 / 32 / 6	70	光る/亮	2 / 22 / 0
35	戦う/战斗	52 / 62 / 2	71	痛む/疼	0 / 20 / 2
36	行く/去	50 / 36 / 38	72	諦める/放弃	0 / 24 / 2

## 4. 日本語話者の「V1-飽きる」と中国語話者の“V1-膩”の比較

本稿は学習者が日本語の「V1-飽きる」に対して、いかなる V1+V2 結合意識を示すのかを見るのが目的である。しかしその前に、日本語話者が母語である日本語の「V1-飽きる」に対してどう捉え、中国語話者が母語である中国語の“V1-膩”に対して捉えているのかを見ておく。

### 4.1 共通点

まず、日本語話者の「V1-飽きる」と中国語話者の“V1-膩”の共通点について見る。杉村(2010)でも指摘したように、両言語とも V1 には「聞く(100%)/听(94%)」、「食べる(98%)/吃(96%)」などの動作主指向性の他動詞や「遊ぶ(94%)/玩(98%)」、「住む(82%)/住(82%)」などの意志的自動詞が来やすく、相対的に「切る(44%)/切(14%)」、「燃やす(30%)/烧(4%)」などの対象指向性の他動詞や「困る(10%)/为难(0%)」、「光る(2%)/亮(0%)」などの無意志自動詞は来にくいという特徴がある。<sup>7</sup> 「V1-飽きる」も“V1-膩”も動作主が V1 の行為を繰り返し行った結果、V1 するのに飽きることを表す表現である。そのため、V1 には自動詞であろうと他動詞であろうと、継続的で動作主の行為に焦点が当たる動詞(動作主指向性の動詞)が来やすいのだと考えられる。

### 4.2 相違点

しかし、「V1-飽きる」と“V1-膩”には次のような違いもある。まず、「集める(58%)/收集(16%)」、「攻める(56%)/进攻(0%)」、「戦う(52%)/战斗(2%)」、「鳴く(48%)/鸣叫(0%)」、「考える(44%)/考虑(6%)」、「悩む(42%)/烦恼(4%)」、「壊す(42%)/破坏(2%)」のように中国語の“V1-膩”は V1 に2音節の動詞を取りにくいという特徴がある。

また、他動詞の場合は、「聞く(100%)/听(94%)」や「食べる(98%)/吃(96%)」など動作主指向性の他動詞の許容度は日中語で許容度にあまり差がないのに対し、「切る(44%)/切(14%)」や「燃やす(30%)/烧(4%)」など対象指向性の他動詞は中国語の許容度のほうがかなり落ちる傾向がある。

さらに意志的自動詞の場合は、「遊ぶ(94%)/玩(98%)」や「住む(82%)/住(82%)」、「歩く

<sup>7</sup> 同様のことは「V1-疲れる/V1-累」や「V1-慣れる/V1-惯」にも見られる現象である。ただし、「見慣れる」や「見飽きる」とは言っても「\*見疲れる」とは言いにくいなど、3者の間にも細かな違いはある。

(58%)/走(42%)」、「眠る(36%)/睡(46%)」などの許容度は日中語であり差がないのに対し、「泳ぐ(88%)/游(54%)」、「走る(70%)/跑(48%)」、「騒ぐ(66%)/吵(闹)(38%)」、「登る(64%)/爬(28%)」、「逃げる(32%)/逃(4%)」など動作主の移動や身体的活動を表すものは日本語の許容度のほうが高くなり、<sup>8</sup> 「座る(42%)/坐(70%)」、「泊まる(26%)/住(82%)」、「立つ(24%)/站(60%)」、「居る(22%)/呆(54%)」など動作主の静的な行為を表すものは中国語の許容度のほうが上がる傾向がある。

## 5. 日本語学習者の「V1-飽きる」について

次に学習者の「V1-飽きる」の許容度について観察し、中国語話者の“V1-膩”よりも日本語話者の「V1-飽きる」に近い許容度となる傾向があることを見る。

### 5.1 中国語の V1 が2音節の動詞の場合

4.2 で見たように中国語の“V1-膩”は V1 に2音節の動詞を取りにくいという特徴がある。しかしこの場合、学習者は母語である中国語の“V1-膩”よりも日本語話者の「V1-飽きる」に近い数字かそれ以上の値を示す傾向がある(表3)。このことから、この場合に学習者は中国語の“V1-膩”からの影響をあまり受けていないことが分かる。

表3 中国語の V1 が2音節の動詞の場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
集める/收集	58 / 30 / 16	休む/休息	28 / 60 / 20
攻める/进攻	56 / 44 / 0	驚く/吃惊	28 / 32 / 0
戦う/战斗	52 / 62 / 2	進む/进展	20 / 36 / 0
働く/工作	48 / 72 / 42	帰る/回去	18 / 16 / 4
鳴く/鸣叫	48 / 56 / 0	迷う/犹豫	16 / 30 / 0
考える/考虑	44 / 60 / 6	困る/为难	10 / 42 / 0
悩む/烦恼	42 / 56 / 4	溺れる/溺水	6 / 30 / 0
壊す/破坏	42 / 38 / 2	倦む/厌烦	4 / 38 / 8
動く/活动	34 / 50 / 20	萌える/发芽	2 / 26 / 2
暮らす/生活	28 / 46 / 20	諦める/放弃	0 / 24 / 2

<sup>8</sup> 同様のことは「踊る(100%)/跳(58%)」にも見られる。「踊る(跳)」は「踊りを踊る(跳舞)」のようにヲ格補語(目的語)をとるため一般に他動詞に分類される。しかし、「踊る(跳)」は「踊り(舞)」への働き掛けを表すのではなく、動作主自身の身体的活動を表すという点で非能格自動詞と共通した性質を持っている。



なお、「働き飽きる」、「暮らし飽きる」、「休み飽きる」は日本語話者に比べて学習者の許容度が少し高めになる。この点については 5.4 節で論じることにする。

## 5.2 V1 が他動詞の場合

V1 が他動詞の場合、日中語とも動作主志向性の他動詞(他動性の低いもの)ほど許容度が高く、対象指向性の他動詞(他動性の高いもの)ほど許容度が低くなるという傾向が見られる。これと並行して、学習者の「V1-飽きる」も他動性の低いものほど許容度が高くなる傾向が見られる(表4)。<sup>9</sup>

表4 V1 が他動詞の場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
見る/看	100 / 62 / 98	叩く/敲	52 / 50 / 30
聞く/听	100 / 86 / 94	打つ/打	48 / 56 / 38
踊る/跳	100 / 72 / 58	選ぶ/选	30 / 40 / 30
食べる/吃	98 / 90 / 96	探す/找	78 / 56 / 18
歌う/唱	96 / 72 / 90	噛む/咬	72 / 70 / 8
読む/读	94 / 80 / 84	投げる/扔	70 / 52 / 10
書く/写	92 / 82 / 86	殴る/揍	52 / 64 / 8
飲む/喝	92 / 82 / 80	折る/折	52 / 32 / 6
話す/讲	92 / 78 / 84	切る/切	44 / 46 / 14
言う/说	90 / 74 / 80	壊す/破坏	42 / 38 / 2
待つ/等	70 / 78 / 64	押す/按, 推	40 / 46 / 12, 10
作る/做	78 / 68 / 78	持つ/拿	38 / 32 / 10
叫ぶ/喊	64 / 44 / 58	燃やす/烧	30 / 34 / 4

ここで興味深いのは、動作主志向性の他動詞の場合は全般的に3つのアンケートの許容度が近いのに対し、対象指向性の他動詞の場合は中国語話者の“V1-膩”の許容度だけが他の2つのアンケートに比べて著しく低くなる点である。このことから、V1 が他動詞の場合、学習者は中国語の“V1-膩”からの影響をあまり受けず、日本語話者に近い感覚で許容度を捉えていることが分かる。

<sup>9</sup> 注8で述べたように「踊る/跳」は非能格自動詞と共通した性質を持っているため“跳膩”の許容度が大きく落ちると考えられる。なお、学習者の「見飽きる」の許容度がさほど高くない理由については不明である。

## 5.3 V1が無意志自動詞の場合

V1が無意志自動詞の場合、日本語話者の「V1-飽きる」の許容度は、V2が「泣く」、「笑う」の場合には相対的に高くなり、「鳴く」、「怒る」、「悩む」がこれに続き、「驚く」、「迷う」、「困る」、「光る」、「痛む」などは許容度が非常に低くなるという違いを見せる。「V1-飽きる」は動作主の主体的で継続的な行為の結果、当該行為に飽きが生じたことを表すため、一般的に無意志自動詞とは共起しにくい。しかし、「泣く」と「笑う」は「～するように努めよう」という意味で「泣こう」、「笑おう」と言えるため、相対的に許容度が高くなると考えられる。また「鳴く」、「怒る」、「悩む」は意志形の「鳴こう」、「怒ろう」、「悩もう」は不自然であるものの、命令の「鳴け」、「怒れ」、「悩め」なら言えるため、それに準ずる許容度になると考えられる。

これに対し、中国語の“V1-膩”は全体的に無意志自動詞と共起しにくい点で日本語の「V1-飽きる」とは違いがある。ただし、“哭”や“笑”なら多少言いやすくなる点においては日本語の「V1-飽きる」と共通している。

一方、学習者の「V1-飽きる」も意志性の高いものほど許容度が高くなる傾向が見られる(表5)。しかし、詳しく見ると、V1が「泣く」、「笑う」、「鳴く」、「怒る」、「悩む」のように相対的に意志性の高いものは日本語話者に近い許容度を示し、「迷う」、「困る」、「光る」、「痛む」のように相対的に意志性の低いものは日本語話者よりも許容度が高めになることが分かる。このことから、「V1-飽きる」のV1が無意志自動詞の場合、学習者は中国語の“V1-膩”からの影響をあまり受けず、日本語話者に近い感覚で許容度を捉えていることが分かる。ただし、それはV1が相対的に意志性の高い場合であり、意志性の低い場合には日本語話者に比べて「非文法的である」という直観が働かないため、少し高めの許容度になる。

表5 V1が無意志自動詞の場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
泣く/哭	78 / 78 / 36	溺れる/溺水	6 / 30 / 0
笑う/笑	60 / 70 / 20	倦む/厌烦	4 / 38 / 8
鳴く/鸣叫	48 / 56 / 0	咲く/(花)开	4 / 44 / 4
怒る/气	44 / 30 / 2	萌える/发芽	2 / 26 / 2
悩む/烦恼	42 / 56 / 4	光る/亮	2 / 22 / 0
驚く/吃惊	28 / 32 / 0	痛む/疼	0 / 20 / 2
迷う/犹豫	16 / 30 / 0	諦める/放弃	0 / 24 / 2
困る/为难	10 / 42 / 0		

## 5.4 V1 が意志的自動詞の場合

V1 が意志的自動詞の場合、母語話者の「遊ぶ(94%)/玩(98%)」、「住む(82%)/住(82%)」、「歩く(58%)/走(42%)」、「眠る(36%)/睡(46%)」などの許容度は、日中語であり差が見られない。しかし、学習者の場合、日本語の「遊ぶ(80%)」や「住む(52%)」の許容度はこれらより下がりぎみになり、「歩く(72%)」や「眠る(60%)」の許容度はこれらより上がりぎみになる。このように、V1 が意志的自動詞の場合、他動詞や無意志自動詞に比べて3つのアンケートの許容度の差に様々なバリエーションがあり、一律に傾向を述べることは困難である(表6)。しかし、同じ意志的自動詞でも似かよった意味を持つもの同士まとめると、そこにはある一定の傾向が見られることに気づく。

表6 V1 が意志的自動詞の場合 (%)

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
遊ぶ/玩	94 / 80 / 98	眠る/睡	36 / 60 / 46
泳ぐ/游	88 / 68 / 54	来る/来	34 / 20 / 30
乗る/坐(车)	86 / 24 / 60	動く/活动	34 / 50 / 20
住む/住	82 / 52 / 82	逃げる/逃	32 / 42 / 4
走る/跑	70 / 76 / 48	飛ぶ/飞	30 / 48 / 28
騒ぐ/吵(闹)	66 / 38 / 38	暮らす/生活	28 / 46 / 20
登る/爬	64 / 54 / 28	休む/休息	28 / 60 / 20
寝る/躺	62 / 84 / 68	泊まる/住	26 / 34 / 82
歩く/走	58 / 72 / 42	立つ/站	24 / 50 / 60
戦う/战斗	52 / 62 / 2	居る/呆	22 / 46 / 54
行く/去	50 / 36 / 38	進む/进展	20 / 36 / 0
働く/工作	48 / 72 / 42	帰る/回去	18 / 16 / 4
座る/坐	42 / 44 / 70		

まず、V1 が動作主の移動や身体的活動を表す場合、日本語話者の「V1-飽きる」は「帰る飽きる」の 18%から「泳ぎ飽きる」88%まで許容度に大きな差が見られ、「泳ぐ」、「走る」、「騒ぐ」、「登る」のように動作主の身体的動きが大きいものほど許容されやすいことが分かる。一方、中国語話者の“V1-膩”は V1 が2音節語の場合に許容度が大きく下がることを除けば、およそ 30~50%の範囲に落ち着いていることが分かる。これに対し、学習者の「V1-飽きる」は、V1 に「走る」、「歩く」、「泳ぐ」のような「移動手段」を表すものが来る場合に許容度が高くなり、「進む」、「来る」、「帰る」のように「移動行為」を表すものが来る場合に許容度が低くなる傾向が見られる。「移動の様態」と「移動行為」の違いは、(3)のように「様態+行

為」の順番で言うことは可能でも、(4)のように「行為＋様態」の順には言えないことから区別される。

(3) {走って/歩いて/泳いで}{進む/来る/帰る} (様態＋行為)

(4)\*{進んで/来て/帰って}{走る/歩く/泳ぐ} (行為＋様態)

また、「走る」、「歩く」、「泳ぐ」などは(5a)のように移動経路を補語にとりやすく、着点を補語にとる場合は(5b)のように「向かって」の補助が必要である。一方、「進む」、「来る」、「帰る」などは(6a)や(6b)のように移動経路も着点も自然に補語にとることができ、相対的に到達のイメージが強くなる。

(5)a. 経路を{走る/歩く/泳ぐ}

b. 着点{?に/に/向かって}{走る/歩く/泳ぐ}

(6)a. 経路を{進む/来る/帰る}

b. 着点に{進む/来る/帰る}

先の他動詞に「動作主指向性」のものと「対象指向性」のものがあるのと同様に、意志的自動詞の中にも「走る」、「歩く」、「泳ぐ」のように動作主の移動の様態を表す「動作主指向性の意志的自動詞」と、「進む」、「来る」、「帰る」のように移動の着点(場合によっては起点「カラ」)に焦点が当たりやすい「対象(＝着点・起点)指向性の意志的自動詞」とがあると考えられる。ここで「V1-飽きる」に話を戻すと、学習者は日本語話者の「V1-飽きる」や中国語話者の“V1-膩”の V1+V2 結合意識とは別に、「動作主指向性の意志的自動詞」の許容度は高く捉え、「対象指向性の意志的自動詞」の許容度は低く捉えていることが分かる。このことから、学習者は「V1-飽きる」の V1 が「動作主指向性の動詞」の場合には許容度を高く捉え、そうでない場合には許容度を低く捉える傾向のあることが指摘できる。<sup>10</sup> (表7)

表7 V1 が動作主の移動や身体的活動を表す動詞の場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
走る/跑	70 / 76 / 48	逃げる/逃	32 / 42 / 4
歩く/走	58 / 72 / 42	騒ぐ/吵(闹)	66 / 38 / 38
泳ぐ/游	88 / 68 / 54	行く/去	50 / 36 / 38
登る/爬	64 / 54 / 28	進む/进展	20 / 36 / 0
動く/活动	34 / 50 / 20	来る/来	34 / 20 / 30
飛ぶ/飞	30 / 48 / 28	帰る/回去	18 / 16 / 4

<sup>10</sup> この場合、学習者の「V1-慣れる」では全体的に許容度が日中語の中間の50%前後になる傾向がある。(杉村 2011a)

次に、V1が労働や生活、休息を表す場合を見る。この場合、母語では日中語で許容度が似た数字となるが、学習者の許容度はこれらより幾分高めの値を示す。これらの行為は人間生活の中で習慣的に行われるものであり、「飽きたからやめる」というような性質のものではないため、日中語とも許容度が中位から下位になるものと思われる。しかし、学習者はこれらの行為も動作主指向性のものであるため、過剰般化を行って許容度が高くなると考えられる。(表8)

表8 V1が労働や生活、休息を表す動詞の場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
寝る/躺	62 / 84 / 68	暮らす/生活	28 / 46 / 20
働く/工作	48 / 72 / 42	休む/休息	28 / 60 / 20
眠る/睡	36 / 60 / 46		

一方、同じ意志的自動詞でも「座る/坐」、「泊まる/住」、「立つ/站」、「居る/呆」のように動作主の静的な行為を表すものは、中国語の“V1-膩”に比べて日本語の「V1-飽きる」の許容度が低くなる。これらの動詞の場合、学習者の許容度は「座る」と「泊まる」は日本語話者の「V1-飽きる」の値に近く、「立つ」と「居る」は中国語話者の“V1-膩”の値に近いという違いがある。しかし、いずれの場合も許容度が 50%かそれを少し下回る値を示す点で共通している。これらの動詞は補語として「着点ニ」をとることで共通しており、「対象指向性の意志的自動詞」に分類される。そのため、学習者は一律に 50%を少し割るようなやや低めの許容度を示したものと思われる。<sup>11</sup> (表9)

表9 V1が動作主の静的な行為を表す動詞の場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
座る/坐	42 / 44 / 70	立つ/站	24 / 50 / 60
泊まる/住	26 / 34 / 82	居る/呆	22 / 46 / 54

また、「乗り飽きる」や「住み飽きる」の場合、学習者の「V1-飽きる」の許容度は日本語話者の「V1-飽きる」や中国語話者の“V1-膩”に比べてかなり低い値となる。これもこれらの動詞が「着点ニ」をとる「対象指向性の意志的自動詞」だからであると考えられる。(表 10)

<sup>11</sup> この場合、学習者の「V1-慣れる」では中国語の“V1-慣”からの負の転移が生じている。(杉村 2011a)

表 10 学習者の許容度が他の2つより落ちる場合

V1	許容度 (%)	V1	許容度 (%)
乗る/坐(车)	86 / 24 / 60	住む/住	82 / 52 / 82

このように「V1-飽きる」の V1 に意志的自動詞が来る場合、学習者は「動作主指向性の意志的自動詞」の許容度は高く捉え、「対象指向性の意志的自動詞」の許容度は低く捉えるというように、学習者独自の規則で許容度を測っていることが窺われる。

## 6. まとめ

以上、本稿ではアンケートによる文法性判断テストを利用して、複合動詞「V1-飽きる」に関する中国語話者の V1+V2 結合意識について分析し、次のことを明らかにした。

### [1] V1 が他動詞の場合

- ・ 学習者は母語である中国語の“V1-膩”よりは日本語話者の「V1-飽きる」に近い感覚で許容度を捉える。
- ・ 学習者は「聞く」、「食べる」のように V1 が「動作主指向性の他動詞」の場合は許容度を高く捉え、「切る」、「燃やす」のように V1 が「対象指向性の他動詞」の場合は許容度を低く捉える。

### [2] V1 が無意志自動詞の場合

- ・ 学習者は母語である中国語の“V1-膩”よりは日本語話者の「V1-飽きる」に近い感覚で許容度を捉える。
- ・ 学習者は「泣く」、「笑う」のように V1 の相対的に意志性が高い場合は許容度を高く捉え、「鳴く」、「怒る」、「悩む」のように意志性が落ちる場合は許容度が落ち、「迷う」、「困る」、「光る」、「痛む」のように意志性の低いものは許容度を低く捉える。

### [3] V1 が意志的自動詞の場合

- ・ 学習者は日本語話者の「V1-飽きる」や中国語話者の“V1-膩”の V1+V2 結合意識とは別に、学習者独自の規則で許容度を捉える。
- ・ 学習者は「歩く」、「働く」のように V1 が「動作主指向性の意志的自動詞」の場合は許

容度を高く捉え、「行く」、「座る」、「住む」のように V1 が「対象指向性の意志的自動詞」の場合は許容度を低く捉える。

また、全般的に日本語話者の許容度が低い項目において、学習者の許容度は日本語話者よりも許容度が高めになる傾向がある。これは、一般的に学習者は日本語話者並みの直観が働かず、「自然な文を自然である」と判断するのに比べ、「不自然な文を不自然である」と判断するのは難しいためであると考えられる。

以上のように、本稿では学習者の「V1-飽きる」に対する許容意識は、母語である中国語の“V1-膩”よりも日本語話者の「V1-飽きる」に近いことが明らかとなった。これは同じ「～するのに V2 する」という構造を持つ複合動詞でも、「V1-慣れる」の場合には母語である中国語の“V1-慣”からの転移が見られるのとは対照的で興味深い現象である(杉村 2011a 参照)。この点については今後さらに分析していきたいと考えている。

#### [参考文献]

- 天野みどり(1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』第 151 集, 国語学会, pp.1-14
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 沈力・林宗宏(2009)「中国語の結果構文と事象構造」沈力・赵华敏(主编)『汉日理论语言学研究』, 学苑出版社, pp.197-209
- 杉村 泰(2007)「複合動詞「一疲れる」の前項動詞の特徴について」『ことばの科学』第 20 号, 名古屋大学言語文化研究, pp.101-115
- 杉村 泰(2009)「複合動詞「一慣れる」と「一飽きる」の V1+V2 結合について」『銘傳日本語教育第』12 期, 銘傳大学応用語文学院応用日語学系, pp.1-18
- 杉村 泰(2010)「複合動詞「一慣れる」と「一飽きる」について—コーパス調査とアンケート調査—」『漢日語言対比研究論叢』第 1 輯. 漢日対比語言学研究(協作)会・北京大学外国語学院日本語文化系合編、北京大学出版社, pp.228-234

杉村 泰

杉村 泰(2011a)「中国語話者による複合動詞「V1-慣れる」の V1+V2 結合」『中国語話者のための日本語教育研究』第 2 号, 中国語話者のための日本語教育研究会、日中言語文化出版社, pp.27-41

杉村 泰(2011b)「日本語の複合動詞「～慣れる」、「～飽きる」と中国語の複合動詞“～慣”、“～膩”の V1+V2 結合について」『日语学习与研究』2011 年第 5 期(通巻第 156 号), 中国日語教学研究会、对外經濟貿易大学, pp.10-16

張 麟声(2007)『中国語話者のための日本語教育研究入門』大阪府立大学

松本 曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第 114 号, 日本言語学会, pp.37-82

由本陽子(2008)「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」『レキシコンフォーラム』No.4, ひつじ書房, pp.1-30